

熊本と東松島の

絆

東日本大震災 宮城県東松島市の現状報告



2011年に発生した東日本大震災から3年が経過。少しずつ被災地の現状を知る機会も減っているような気がします。

そのような中、阿蘇市職員が震災直後から復興支援に当たった宮城県東松島市から、被災地の“今”を伝えていただきました。



東松島市総務課 小山 淳志さん

宮城県東松島市は、東日本大震災発生以降、阿蘇市を始め熊本県の皆さんから多くの支援をいただいています。その概要と復興の状況を紹介します。

震災発生直後の平成23年4月から12月まで、熊本県の県職員・市町村職員による合同支援チーム「チーム熊本」（全34次）が東松島市に派遣され、市役所での災害対応窓口業務や申請書類の整理、市内でのボランティア活動など多岐にわたりご支援をいただきました。

平成24年4月からは熊本市職員および熊本県内の市町村職員約40人が、東松島市の復興事業を担うため、最長1年間長期派遣されています。

また、熊本県内の小学校から被災した東松島の学校に支援米が届けられたり、熊本市図書館から東松島市図書館に移動図書館バスが貸し出されるなど、さまざまな形でのご支援をいただきました。

そして、熊本県PRキャラクター・くまモンも、被災した東松島の保育所などを訪れ、子どもたちを励ましてくれました。

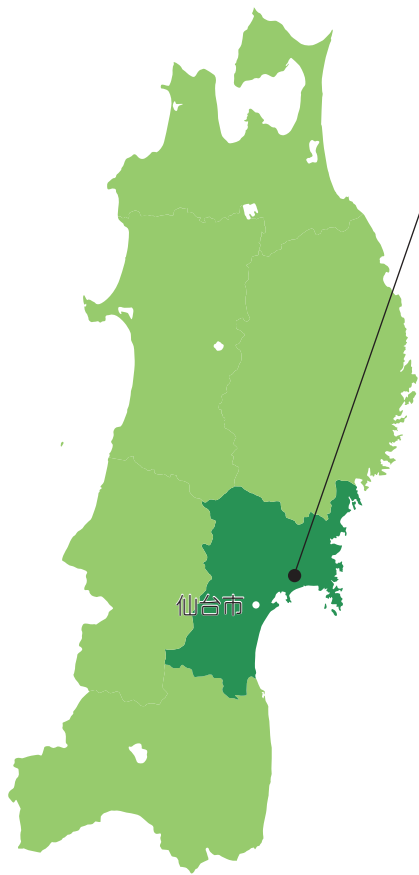
現在、被災された方々は、1450戸以上の仮設住宅や、市内外の民間賃貸住宅などに入居し、今後の生活や将来の展望を模索しています。

大きな課題として「住宅の再建」「公共交通機関の復旧」「雇用の確保と地域経済の復興」などが挙げられます。特に快適な住環境と安定した雇用の確保が実現しなければ、本市からの人口流出を防ぐことができません。

東松島市では、被災した市民の皆さんにとって「災害に強く安全なまち」「安心して笑顔で暮らせるまち」となるよう、内陸部への集団移転先の造成工事と災害公営住宅の建設・入居、合わせて市民の住宅再建を進めています。同時に、新たな地域コミュニティの形成・再構築のため、市と市民が一体となって協働で取り組む組織を立ち上げました。

また、持続可能で新たなライフスタイルとなるモデル都市を目指し、3年前、東松島市は国の環境未来都市の認定を受け、昨年夏には野蒜海岸近くにメガソーラーが完成しています。

そして、震災により代行バスでの運行が続いているJR仙石線の



宮城県東松島市



●市の概要

【人口】40,193人 【世帯数】14,905世帯（平成26年3月1日現在）

【基幹産業】農業（米、野菜など）、水産業（カキ、海苔など）

●東日本大震災の被害状況

【死者】1,109人 【行方不明者】25人 【遺体収容数】1,066人

【家屋被害】全壊：5,513棟 大規模半壊：3,060棟

半壊：2,500棟 一部損壊：3,506棟



阿蘇市と東松島市の絆



支援に当たった熊本市町村職員

阿蘇市は、熊本県の合同支援チームの一員として、東松島市に2011年4月から12月までの間に、32人の職員を派遣し、罹災証明書の発行業務やボランティアセンターの活動支援に当たりました。県内では熊本市、天草市に次ぐ職員を派遣。東松島市の阿部秀保市長からもお礼の書簡をいただいています。

一方で、平成24年7月の九州北部豪雨災害時には、いち早く東松島市職員らが阿蘇市に駆けつけていただき、災害復興寄付金をいただくなど、市同士の絆は、より一層関わり深いものとなっています。

（上）奥松島「絆」ソーラーパークは、復興と「環境未来都市」を支援する民間企業からの事業提案から実現したもので、一般家庭の約600世帯に相当する発電が可能。発電した電気はすべて電力会社に売電する。敷地内に高さ4mの築山があり、環境学習の場として自由に見学することができる。

（下）戸建型および集合型の災害公営住宅として約1,000戸を整備。ことし4月には、小松谷地地区災害公営住宅をはじめとする約250戸が完成し、順次入居を開始予定。なお、平成27年度までに順次整備、完成・入居していく予定。

は、鉄道路線を内陸部に移して平成27年中に開通予定です。
津波で被害を受けた農地や漁港・河川海岸の堤防の復旧工事は現在も進められ、地域経済の担い手である市内の事業者たちも、それぞれの業種・分野で頑張っています。
復興への道のりはまだまだ長く険しいものがあります。これからも、被災地・東松島のことを想うこと、記憶していただくことだけでも、大きな支援になります。
熊本県と東松島市の縁と絆が、これからもより一層深まることを願っています。